

米騒動余談

木畑竜治郎

大正七年八月十二日神戸湊川の遊園地に集合した群衆は遂に暴徒と交じて市内の米取扱者を襲撃し茲に史上稀なる米騒動が勃発した。

前日米北陸、名古屋、京都等の米騒動の情報頻々として新聞の報ずる所となり、我が鈴木商店に於ても万に備え本店、港湾倉庫、薄荷工場警戒を厳にし店員の夜の外出、マールの佩用中止等を布達したが、不幸十二日夜遂に暴徒の荒れ狂う処となり焼打の惨に遭遇した。

これより先、本店燐寸部主任西岡勢七は事の危急と持ち前の熱血とから直に「先生」金子直吉の許を得て蹶起勇奮、その部下木畑光治郎を走

名簿作成につき御依頼

来年三月中に新名簿作成致し度く存じますので、御芳名、生年月日、御住所、電話番号、現在の御動静を至急本部迄御通知下さるよう御願ひ申し上げます。(用紙は別便にてお手許に届けます)

敬老の日に思う

藤内金次

七人の孫をもつ私に、第一号の孫娘(薬大一年生)が九月十五日の「敬老の日」に花束とカステラを持参して、おぢいちゃん元気で長生をして下さい。とやって来た。

齒も悪かろうとカステラにした思いやりは判るが、堅い豆でもバリバリ喰べる私のこと「お前のおぢいちゃんには違いないが、まだまだ老人扱はご免だヨ」と起ち上って元気に一チニイ三ンと大声で体操をして見せた。私も六十の坂をやつと越したところ、毎日の仕事に忙がしく立廻っている。

九月十五日が敬老の日に制定されて、新聞やラジオ、テレビで盛んに敬老会、○○会など、としよりに対する話題が賑かに各地の催物等知らされた。

らせて警備の壮士数十名を掻き集めさせた。西岡勢七は土佐の産、幼にして青雲の志を抱き上阪、大阪中の島の南洋貿易商川原儀六商店に奉職する。所謂丁稚奉公よりたたき上げ

大阪の商魂、土根性を身につけ不屈の郷土魂と大胆不敵無類の熱血漢であった。が川原儀六は徹底的なげん坊で営業方針も消極的な色彩が多

川原寛太郎(儀六の養子入籍)井筒卯三郎、木畑光治郎で、私の父木畑光治郎は当時の大阪府西成郡鷺洲村鈴木商店炭酸加里工場(旧東レザ

た。そして川原寛太郎は本店雑貨部、井筒卯三郎は本店塩業部にそれぞれ職を奉ずる事となった。

さて木畑は西岡の命を帯して直に大阪府中河内郡大友町(現布施市)の上田安次郎宅へ飛んで、血気の若者四十名余を「きゆう合」して準備もそこそこに急拠鈴木商店警護のため神戸へ出発した。

一寸上田安次郎の身辺にふれる事にする。上田安次郎は通称「大安」「やんこさん」と云われ、今里鶴橋にたてこもって縄張りを有し、表面は運搬業者尿汲取り業として居たが実質はその頃の「ばくち打ち」「遊人」の親分として羽振りを聞かして居

上田安の命令一下「鉄包玉」四十名余それとばかり竹槍太刀の武器を「こも巻」にして、三々伍々人目に

辰巳会誌五号のなかで浅田長平氏の談話が掲載されていたが、神戸商工会議所会頭としての事業の抱負を語られたが氏は既に八十才になられたも、尚矍鑠として居られ関西経済

浅田さんこのライトと同じだろうと思う。辰巳会寄贈の大杯にも「僕は頂いたお礼は八十八の米寿の時に云わして貰う」と舞子ヴィラの席上で若いところを披露された。精神的な領域でも芸術的な領域でも何かに没頭できる者は、いつまでも若いのである。古来精神活動と長生きと

医聖ポクラテスは百十四才、哲学者ゾゲネスは九十八才、当時の平

つかぬ様大阪梅田より阪神電車神戸に向ったが、既に神戸市中は県警姫路三九聊隊が出勤して戒厳令前夜を思わせる如き物々しき、上田の義勇隊も大半有無を云わず「けんそく」され僅に十五名程辛うじて丸腰で鈴木商店に馳せ参じた。それでも西岡は大変頼もしくよろこび早速腕の印半纏を着用させ夜目にも判る橙に黄色の「たすき」を十字に縁取らせ敵味方判別の目印とした。

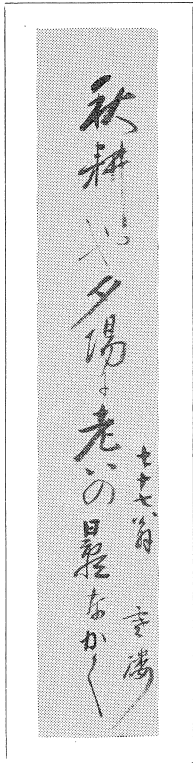
そして悪夢の十二日の夜は明けた。東川崎町の本店は無惨にもオンドルチムニーを林立させて見る影もなくなつて居た。急を知つた店員一同や家の子郎党は忙然として焼跡にたたずんだ。私もその一人であったがたつた一つその焼跡の取り片づけに「屈強」の若者が丸裸の背に黄色の「たすき」を掛けて働いて居るのが特に印象的であった。後から思い合せてそれが上田安の若者であった事を知つた。

後日語りには西岡が相生橋警察へお百度をふんで、けんそく者の身柄引取りに多大の労力を費した無駄話を聞いた事がある。

均寿命わずか二十二才であった。近代でも作家トルストイ八十三才、メーテルリンク八十七才、ハウプトマン八十四才、テニス八十三才、ジイド八十二才、シューマン八十一才、R・シュトラウス八十五才と生きて、みな晩年に大作をのこしている。画家や彫刻家が晩年になるほど力作を描いたことは、モネー八十六才、ドガ八十三才、ルノアール七十八才、ロダン七十七才、チチアンの最大傑作「臥せるヴィーナス」は九十九才の作、ゴヤは八十三才で死んだが闘牛の連続銅版画を完成したのは七十五才であった。現在の人ではピカソやシャガールのように八十才以上でまだ活躍をつづけている人は放拳にいとまない。

長寿になつた今日、八十、九十は未だ若いのである。ローマの医者ガレーヌスは西暦一七二二年に述べた忠告で「活動は最良の自然療法であり幸福な長生きに欠くべからざるものなり」と述べている。忙がしく働く人は年をとらないと云う、実際そうである。ものごとに興味を見出せるうちは、人間の頭脳はいつまでも成長をつづける。

辰巳会の皆さん益々元気で長生しましょう。(四一、九、二〇)



小野三郎氏筆